

アルス国際製靴学校研修体験記

(平成17年9月26日～12月26日)

(株)ナガセ 藤好豪
クラウン製靴(株) 水谷岳史

今回、東京都皮革産業技術研究派遣員として、イタリア・ミラノARS SCHOOLに約3か月間製靴のパターンを学びに滞在させていただきました。今までの経験、また、これからの経験でも出来るかどうか分からない貴重な体験を過ごせたことに感謝しています。



写真1 左：藤好豪 右：ルナティ先生

学校の授業は、前に話で聞いていましたイタリア語・英語コースには別れずに、1クラスで授業を進めていました。始めに英語で説明し、その後にイタリア語で説明するという進め方でした。講師は4名いて、ルナティ氏、パオロ氏、ロベルト氏、アウグスト氏でした。私たちの3か月コースには、ロベルト氏が主に授業をし、アウグスト氏がアシスタントで進めていました。最後の2週間はルナティ氏が教えてくださり、テストもルナティ氏が実施するというかたちでした。



写真2 左：ルナティ先生 右：水谷岳史

クラス編成は、イタリア5人、日本4人、メキシコ2人、アメリカ1人、カナダ1人、ドイツ1人、オーストラリア1人、イスラエル1人、トルコ1人、台湾1人の計18名でした。皆、素晴らしいクラスメイトでした。その他に1か月コースで来た方も加わることもありました。卒業生や見学の方も多く見られ、「さすがはARSだな。」と感じました。



写真3 クラスメイトと先生

パターンの授業は、まず始めに原型の取り方から始まって、パンプス、外羽根、内羽根、袋、ローファ、モカシン、アングルブーツ、ロングブーツ、ニーブーツ、アシメトリー、サンダル、スニーカー、プラット、サボ、立体での取り方を教わり、そして全て紙プルオーバーまで作成しました。その全てがクセの取り方の数値が決まっていた。

型紙を取る際、日本に限らず、木型にデザインを乗せ、平面に落とし込む方法が一般的ですが、ARS式は木型の元型をつくり、その元型にデザインを乗せて、パターン作成を行います。木型ではなく平面上でデザインを乗せるため、立体になった時を想像しながら、平面でデザイン線を引くには、少々経験が必要でした。

デザインも型紙同様、描くうえでのルールを設け、手順に沿って描いてゆけばきちんと靴の絵が出来上がり、絵心の無い私たちにとっては目から鱗でした。

実技に関する授業は、パターン作成と紙アップー作成のみで、製甲・底付けに関する実技は一切行われません。そのため、3か月間ひたすらパターンだけを取り続けます。この反復作業は型紙作成の技術向上だけでなく、作業スピードの向上にも大いに役立ちました。

MONDAY TESTというTEST形式のものがあり、課題とされる3型のデザイン画をもらい、型紙を作成して、紙プルオーバーまで仕上げ、先生に見せてOKをもらい提出するという課題がありました。そして、BUSTA (ENVELOPE) という課題もあり、授業中に仕上げたものを封筒に入れ提出するというものが計14型ありました。1か月弱が過ぎると、午前中の2時間程をあてて革の種類、裁断方法、なめし方法、測定方法、SF (スクエア・フィート) からDS (デ

シ) への換算方法、製靴方法、ラストプロポーション、インターナショナルサイズの換算式と表示、革によってのかかとの縫い割り代の取り方などの講義がありました。その他、デザイン画の描き方の授業もあり、横からの描き方や上から見た描き方、色の塗り方などもありました。



写真4 授業風景

また、好きな木型を選びデザイン画を描き型紙を作成し、好きな革を選び裁断したものを提出することが2回ありました。それは、外で製甲し先生が釣り込んでくれるというものでした。その他にSPECIAL WORKというものがあり、一つの課題が出され、デザイン画、型紙、革での簡単なアップーを自分のデザインした台紙に貼るというものでした。皆の個性がすごく出ていてとても感性が磨かれた気がしました。

講師陣全員、型紙が取れるのは当たり前で、デザインも上手です。イタリアで言うところのモデリスタという職種は、型紙だけでなく、木型・デザイン、製甲、底付け、専門的製靴知識、革知識など、製靴に関するおよそ全ての技術・知識が一通りなければ成り立たないように思われました。

その他に、特別課外授業でタンナーとメーカー、そしてリニア・ペレ展を見学することができました。工場見学ではミラノ近郊にある「ROVEDA」という婦人靴メーカーに行きました。工場にはCAD /

CAMがずらりと並び、中底までもがCAMで生産されていました。少品種大量生産ではなく、小ロット大量生産で製作するサンプル数は相当な量です。生産コストを抑え、生産スピードも上げなければならず、そのためのCAD / CAM等の設備投資ということで、大変参考になりました。とにかく最先端の設備と工場の広さ綺麗さに圧倒されました。

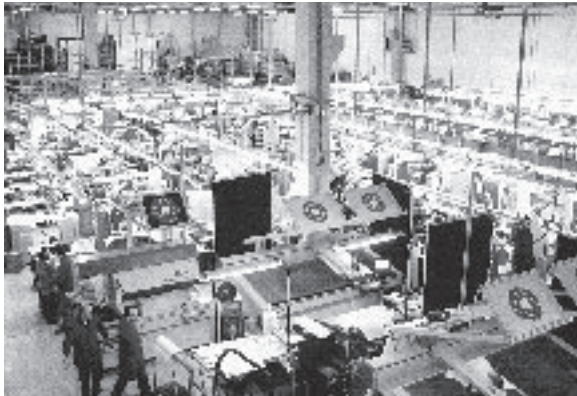


写真5 ROVEDAの工場

次に訪れたリニア・ペレ展では、どこのブースも使用している原皮がイタリアの革なので超1級品でした。課外授業で行ったタンナーを見ても感じたのですが、とても雰囲気のあるというか存在感がある革を作るのは、イタリアが一番だということを改めて思いました。革のブースは結構賑わってはいたのですが、副資材関係、とくに本底やヒール装飾部品のエリアは人が少なかったようです。やはり価格面で中国を始め東南アジアやインドなどの商品に負けているのだなとも感じました。何しろ展示会会場を回るだけでも広すぎて1日ではまず足りません。全部を観るには3日間は必要だと思います。

いま、イタリアの多くの会社がアジアの方に工場を持ち生産しているので、今後どんなものがこの展示会を始めイタリアに並ぶのか、とても興味深く思いました。

卒業試験では、筆記・実技・面接があり



写真6 リニア・ペレ展

ました。筆記は、講義で学んだものをノートにまとめ、授業が終わる最後の週の頭に提出するものでした。実技は最後の週から始まり、ルナティ氏が授業中に出すクラシックモデルの4型とMEN'SかWOMEN'Sの好きな方を選びくじ引きでデザイン画を選び提出するものが1型と計5型でした。

面接は4人の先生がいて、生徒は2人という形でした。まず、実技テストと自分でデザインして釣り込んだアッパーの指摘と修正箇所でした。そして、問題として講義で教わったものを1、2問出されるものでした。

ARSの特徴として、初めてくせの取り方を数値化したのがルナティ氏で、ルナティシステムと言われていています。ルナティ氏は約50年間教えていて、イタリアのパターンナーの多くがARSを卒業していることを知りました。また、海外からの生徒も多く、世界中にルナティシステムを学んだパターンナーがいて、それは日本も例外ではありません。その学校で学べたのはとても光栄に思います。ただ、個人的に思うには、それは逆をいえば50年前に作られたシステムでそこからは進化していないということです。いま流行りのロングノーズものやトゥスプリングの上がったラストから考えると、ルナティシステムを学んだそのまま使うことは難しいと思います。ARSで学んだものをベースに、デザインやラストの

特徴を捉えくせのとり方を工夫していくことが進化だと思います。その考え、やり方を今後の仕事に生かしていきたいと思っています。

ミラノでの私生活の方も、違う文化に触れすごく充実していました。私たち生徒の大半は学校の隣のレジデンスで3か月間生活しました。レジデンスはARSの学校と同じ建物内にあり（学校は1階）、2人部屋の間取りは15畳程度の1Kタイプで、電話、テーブル、ソファ、キッチン（食器も）、バス、トイレ完備、ルームクリーニングは毎日入りますが、ベッドメイキングは火・金の週2日でした。

場所はFIERA MILANO展示会場のすぐ近くで、Duomoからは19番、27番トラムで約20分、MILANO Center駅からは33番トラムで約30分になります。最寄り駅は地下鉄ではパガーノ、鉄道ではドモドッソーラです。近くにはセンピオーネ公園という大きい公園もあり、歩いていけます。気温は日本（東京）より若干寒く、風がなく乾燥しています。

物価は東京とほぼ同じです。食費は、日本にあるようなコンビニ、ファミレス、ファーストフード等がないため、外食メインで生活すると日本より高くなります。近隣にCOOPやDIperDI等のSuper Mercatoがあるため、そちらで買出し、自炊をすることをお勧めします。

食生活ですが、やはりイタリアということもあり、ピザ、パスタ、リゾット、ワインといったものが主です。ただ、やはり飽きてしまうので、近く（徒歩15分位）の場所にある中華街まで行き、中華を食べたりしました。日本食も食べたくないので、中華街や近くのスーパーで食材を買い、レジデンスで作ったりしました。クラスの皆ともすぐに仲よくなり、よく誘い合って食事をしにも行きました。

ファッションの市場は、正直言って日本のほうが上をいっている気がします。ただ、イタリアの建物や雰囲気にあった服装を皆、していた気がします。物は日本も負けてはいないけれども、着こなしが上をいっているというか、一人一人の自己主張の仕方が上手だと感じました。昔からの西洋文化がそうさせているのだと思います。明らかに文化が美というものを求めている国だと思いました。

○研修を終えて

今回行かせていただいたARS 3か月研修は、製靴技術向上に役立つだけでなく、靴の本場であるイタリアで生活をして、日本とは違った、ヨーロッパの感性を吸収することができ、私たちの人生においても、とても有意義な経験となりました。

中でもタンナーやメーカー見学は、世界でも指折りのハイテク機器を導入したメーカーであったため、今後の日本の靴作りにおける良い手本を目で確認することが出来ました。また、先生方や同級生など、イタリア人だけでなく、世界各国の靴関係者と知り合い、様々な国の人とコミュニケーションをとる事で、国の違いによる靴産業の方向性や考え方を共有しました。そうする事で、物作りに対する視野が広がり、今後の自分たちの方向性も確かなものとなりました。

これらの経験は、日本では決して出来るものではなく、3か月間、世界各国の靴関係者と共に勉強し生活するARSでしか得られないと感じます。

この経験を単なる経験で終わらせることなく必ず現場で活かすことで、ARS研修に行かせていただくために尽力して下さった関係者の方々への御礼とさせていただきます。ありがとうございます。